親族研究における進化概念の受容——進化から変容へ

田中雅一

人類学は進化というパラダイムをとうの昔に否定し葬り去った。これが人類学と進化論との関係についての教科書的な言明であろう。憶測的な歴史の再構築を否定し、資料の実証的価値を高めると同時に、進化という絶対的な価値基準に代わって文化相対主義の立場を強調してきたのが人類学の歴史であった。だが本当にそうであろうか。本論では親族研究を例にとって、そこに根強く認められる進化のパラダイムを探ってみたい。

進化論は、進化のプロセスを探ると同時に、現象の起源を探る学術的立場でもあった。その意味で、進化論で提唱されたさまざまな概念、たとえば宗教に限って言えばトーテミズムやシャマニズム、アニミズム、アニマティズムあるいはマナイズムといった概念は、進化論のパラダイムのもとで生まれてきたが、同時にそれは宗教の起源あるいは本質をめぐる問題と結びつき、さらに、宗教の分類用語でもあった。進化の段階論や起源論が廃れた今日でもこれらの言葉が使用されている理由のひとつは、すくなくともその一部が宗教の類型化に有効とみな

されているからに他ならない。ここに実は、人類学と進化論との曖昧な関係の理由のひとつを求めることが可能である。また、一九世紀に唱えられたいくつかの（きわめて大雑把な）図式は、確実な資料が蓄積されてきた今日、かえって否定するのが困難な場合がある。たとえば母系から父系へ、とか、後述する親族の類別的名称から記述的名称へといった図式である。本論では、とくに後者を例に取り、人類学においてどのような形で進化論が今日でも保持されているのかを見ていきたい。しかし、その前に人類学の歴史を簡単にふりかえることにしよう。

一　進化から歴史へ

一九世紀後半、歴史学や人類学の主要なパラダイムは進化論であった。英国では法学者のメインが一八六一年に『古代法』*Ancient Law* を出し、さらにその一〇年後には『村落共同体』*Village Communities* という書物を出版する。同年スイスの法学者バッハオーフェンが『母権』Das Mutterrecht を出す。一八六五年にフェステル・ドゥ・クーランジュの『古代都市』*La cite antique* とマクレナンの『未開の結婚』*Primitive Marraige* が公刊される。アメリカのルイス・ヘンリー・モーガン（モルガン）が親族研究の古典とされる『人類の血族と姻族の諸体系』*Systems of Consanguinity and Affinity of the Human Family* の初稿を完成するのが一八六五年、改訂版が二年後に完成し、公刊されるのは一八七一年であった。その後かれは、それ以上に影響力の強い『古代社会』*Ancient Society* を一八七七年に出す。この書物はマルクスやエンゲルスに大きな影響を与え、前者のとった詳細なノートに触発されて、後者が『家族、私有財産および国家の起源』*Der Ursprung der Familie, des Privateigenthums und des Staats*（一八八四）を著したのはよく知られた事実である。進化論の代表とされるフレーザーが

活躍するのは一九世紀の末で、その代表的な仕事である『金枝篇』*Golden Bough* 全一三巻は一八九〇年から公刊され、一九三六年に完結する。かれはここで呪術から科学へという有名な宗教進化の定式を主張した。

親族研究の古典が相次いで公刊された一九世紀後半は、またダーウィンの時代でもあった。『種の起原』が一八五九年に、『人間の由来』が一八七一年に出版されている。しかし、ダーウィンの影響はこれらの人類学的研究に大きな影響を与えたとは言えない。

このような一九世紀から二〇世紀にかけて進化論に基づく大部の研究成果が公刊されたにもかかわらず、文化人類学あるいは社会人類学という学問領域において進化という概念は、現在あまり使われていない。その理由のひとつは人類学における一連のパラダイム変換に求められる。以下では英国の人類学を中心に、その歴史をおさらいすることにしたい。

まず、一九世紀の主要なパラダイムであった進化主義（evolutionism）は歴史を単線的にとらえていると批判する伝播主義（diffusionism）に二〇世紀初頭に取って代わられた。伝播主義はロンドン大学のユニヴァーシティ・カレッジを中心として発展し、スミスやペリーらが複数の文化圏を提唱し、進化よりも文化圏内の文化要素の伝播を強調した。

さらに、二〇世紀にはいると、一九二二年にマリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』*The Argonauts of Western Pacific* とラドクリフ＝ブラウンの『アンダマン島民』*The Andaman Islanders* が出版され、その成功によって、長期のフィールドワーク（現地調査）と、それに基づく大部のモノグラフの作成、さらに歴史ではなく共時的な視点からの解釈が強調されることになる。かれらの学風は異なるが、一般に機能主義（functionalism）として理解されることになる。かれらの学術的成功は人類学という学問をおおきく変貌させることになる。すなわち、マリノフスキーがロンドン大学経済政治学院の要職につき、ロックフェラー財団の経済的支援を得て、多く

の人類学者をアフリカに送り出す。他方、ラドクリフ＝ブラウンはヨハネスブルク、シドニー、シカゴなどで人類学を教え、戦後はオックスフォードで強力な指導力を発揮した。

第二次世界大戦前の人類学は、基本的に文字のない未開社会――地域的には太平洋とアフリカ――に集中していたため、そもそも歴史を記録した「文字資料」が存在していなかった。このため、歴史ではなく、現在を強調することになる。そして、進化主義も伝播主義もきわめて脆弱な証拠に基づく歴史的憶測にすぎない、と徹底的に批判される。以下に歴史研究についての考え方がよく分かるラドクリフ＝ブラウンのことばを紹介しておこう。

ある歴史解釈が受け入れられるかどうかということは歴史記録が十分あるか、またそれが信頼しうるものであるかどうかということにかかっている。社会人類学が研究する未開社会には、歴史記録はない。〔……〕人類学を歴史研究の一種だと考えている人類学者たちは、推論と想像に陥り、「疑似歴史的」もしくは「疑似因果関係的」解釈を発明しているのである。〔……〕ここでとられている立場は、このような推測は無益であるばかりでなく、無益よりさらに悪いものであるということである。このことは決して歴史的解釈を拒否することを意味するのではなくて、まったくその反対なのである。［ラドクリフ＝ブラウン　一九七五、八―九頁］

つまり、文字資料にとぼしいために推測の域を出ない未開社会の歴史ではなく、実際に見聞できることがらの分析を中心におくべきであるという主張である。したがって、人類学は歴史学を真っ向から否定したというよりは、その未開社会への適用を批判したと述べた方が正確である。

フィールドワークを重視する立場が、結果的に歴史的アプローチを放棄したという非難を招いたことはたしかである。しかし、現実はそれほど単純ではなかった。というのも、人類学が過去を無視して、真に現代的な状況

を扱う学問に変貌したというわけではなかったからだ。ラドクリフ＝ブラウンにとって、フィールドワークに基づく民族誌が目的としていたのは当該社会の現在のすがたの記述と分析ではなく、変化が生じる前のあるべきすがた――「手つかずの」社会、これを民族誌的現在（ethnographic present）とよぶ――の「再」構築であったのである。

ここでいう変化とは、欧米人との接触を意味する。すなわち、人類学が復元しようとした民族誌的現在とは、世界史的には欧米諸国による植民地化が進む以前の社会であり、人類学の目的はその再構築にあったのである。したがって、人類学は、フィールドワークを方法論として確立したあとも歴史（過去）と完全に手を切れてはいなかったのである。だから、現在へのこだわりといっても、気をつけなければならないのは、過去の現在的（共時的）記述、ということになる。変化以前の社会を再構成することで、人類の社会を「収集」し、比較を通じて、より普遍的な社会法則を抽出するというのが、ラドクリフ＝ブラウンの人類学の構想であった。

その後、人類学は歴史と再び出会うことになる。そこに至る回路はいくつかあったが、歴史的展開の契機となった考えのひとつは、フィールドを「未開社会」（過去の人類社会の残存）としてとらえるのではなく、西欧列強の支配下にある植民地としてとらえよう、という立場である。一九三〇年代にマリノフスキーは実用人類学（practical anthropology）の意義を唱えるが、それと関連する形で過去を再構築しようとする立場を徹底的に批判する。なぜならラドクリフ＝ブラウンが構想した人類学とは結局のところ、フィールドで進行中の社会変化を無視することになるからだ。代わって、フィールドの「いま・ここ」を徹底的に記述分析することを提唱する。これによって、人類学はますます歴史から遠ざかったかに見えたが、フィールドのありのままを分析の対象とすることは必然的に、フィールドがおかれている植民地状況を扱わざるを得ないということになった。植民地状況を取りあげるには、欧米との歴史的関係やそれがひきおこす社会変化を無視するわけにはいかない。こうして人類学は現

在に徹底してこだわることで皮肉にも歴史に導かれていったのである［田中 二〇〇一］。

もうひとつ、指摘しておきたいのは、人類学という知の体系をも植民地支配という歴史的文脈で理解しようという、サイードの『オリエンタリズム』*Orientalism* に通じる試みが一九七〇年代に生まれたことである。これが、『ニュー・レフト・レビュー』誌を舞台とし、のちのアサド編集の論文集[Asad 1974]に結実する植民地科学としての人類学を批判するという立場である。フィールドが植民地であるという認識は、人類学をより現代的なもの、実用的なものとして理解しようとする立場を準備したのだが、さらに人類学そのものを植民地支配を支持する科学として批判的に論じようとする視点が生まれたのである。

しかし、現実に歴史への関心が増したのは、一部の例外を除くと、一九七〇年代になって構造主義の影響を受けたフランス・マルクス主義人類学が西アフリカを中心に歴史的な研究成果を問いはじめてからだ。その成果は、フランス人類学の成果を取り組んだモーリス・ブロック編『マルクス主義分析と社会人類学』*Marxist Analyses and Social Anthropology*（一九七五）やJ・フリードマンとM・J・ロウランズ（編）『社会システムの進化』*The Evolution of Social Systems*（一九七七）に結実した。八〇年代になると、ポスト・コロニアル研究の興隆に伴って、政治や文化の領域での、より緻密な人類学的研究が生まれてきた。今日、人類学の基本的な方法は特定の地域を選んで長期の滞在を行うフィールドワークが中心だが、同じくらいの時間を公文書館で過ごす場合もあるし、その成果となるモノグラフは以前よりも歴史的な性格の強いものとなっている。今日、歴史人類学という領域はすでに人類学の中心に根付いているといっても過言ではない。

こうした歴史回帰の状況で、機能主義人類学がいわば歴史とともに葬ってしまった進化への関心はいかなる経路を辿ったのであろうか。進化をテーマとする書物がまったくなかったというわけではない。アメリカでは、ボアズが一八九九年にコロンビア大学の教授に就き、その徹底した反進化主義の立場によって、進化主義は一掃さ

れたかに見えた。しかし、ミシガン大学を拠点とし、レズリィー・ホワイトやジュリアン・スチュワートらを中心に一九四〇年代末から六〇年代にかけて新進化主義派による一連の成果が公刊された。新進化主義派の議論はかれらの弟子であるエルマン・サービスやマーシャル・サーリンズらによって継承され、その一部は高い評価を得ている。

しかし、新進化主義も、後のサーリンズの転向に明らかなように、一九七〇年代になると、ポリティカル・エコノミーの流れに吸収されたり、また文化唯物論あるいは文化生態学へと変貌していく。そういう中で例外は一九八八年に公刊されたホールパイクの『社会進化の原理』*The Principles of Social Evolution* である。また最近ではシンポジウムの記録をもとに、とくに宗教や言語など「ソフト」な側面をあつかったダンバーらの『文化の進化』*The Evolution of Culture* が一九九九年に出版されている[1]。だが、進化への関心はほんの一握りの人類学者だけにあるといっても過言ではない。そのような状況において、本論では親族研究の領域における進化概念の継承について検討していきたい。まず進化主義的親族研究の創始者であり、典型とされるモーガンの業績を吟味しよう。そしてかれが「発見した」類別的と記述的という二つの名称体系をめぐる議論が、その後の人類学においてどのように継承されてきたのかを吟味したい。

二　類別的名称とは?——ドラヴィダ型親族名称体系

モーガンは一八一八年にニューヨーク州西部に生まれた。父は富裕な大土地所有者だった。一八四〇年にカレッジを卒業したあと、法学を専攻し、弁護士となった。四年後にロチェスターに移った。弁護士によって財を築

き、学術活動を続けた。弁護士活動を通じてニューヨーク州のイロコイ族の生活に通じ、その経験に基づいて一八五一年に著した『イロコイ連合』は非ヨーロッパ人に関する完成度の高い民族誌として評価されている。本書で取り扱う『人類の血族と姻族の諸体系』は一八六五年に完成したが、最終的に出版社に受理されたのはその二年後、出版は一八七一年であった。

本書はいくつかの意味で革新的なものであった。すなわち、親族名称に注目したわけだが、それを大きく記述的（descriptive）体系と類別的（classificatory）体系に分けたという点である。記述的体系とは、日本人の場合と同じで、父母、夫婦、兄弟姉妹、息子と娘という核となる親族用語はそれ以外の人々に使用されない場合である。これに対して類別的体系では、父親はいわゆる実父以外も含む。叔父や叔母の一部がチチとかハハと呼ばれ、イトコの一部あるいは全員がキョウダイであったりシマイであったりする。さらに甥や姪もムスコやムスメとなる[2]。

ここで典型的な類別的名称を紹介しておこう。モーガンも注目した南インドのタミル人の親族名称である。これは世代と性によって組織的に親族が分類され、のちにドラヴィダ型名称体系とよばれることになる。われわれが実際にフィールドに入って調査をし始める状況を想定してみよう。何人かのインフォーマントをつかまえて、父とおぼしき人を指さして、タミル語でなんというのか、母とおぼしき人を指してタミル語でなんというのか、と聞いていく。同じことを兄弟や姉妹、さらに叔父や叔母にも拡大して聞いていく。あくまで特定の個人を指して尋ねるのがポイントである。そしてすくなくともわれわれの方にインフォーマントと指示する個人との関係についてある程度知識があることが前提となっている（もちろんその知識はタミル語の習得と密接に関係しているが）。こうして特定の個人（インフォーマント）を中心とする系譜とその親族の固有名、さらに親族名称が系譜上に記されていく（図1）。ここでわれわれは同じ名称が異なる親族に使用されていることに気づく。これを体系化す

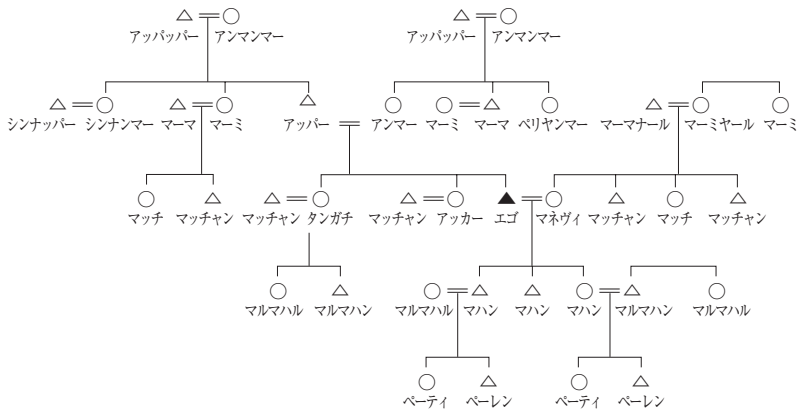

図1　タミル社会の系譜関係と親族名称

ると図2のようになる。

祖父母（ここでは男性の自己すなわちエゴより二世代上）の世代では二つの用語、たとえば男性を指すアッパッパーと女性を指すアンマンマーがある。エゴより一世代上の父母の世代では、父はアッパー、父の兄弟はペリヤッパー（兄の場合、文字通り大きい父）やシンナッパー（弟の場合、小さな父）、母はアンマー、母の姉妹はペリアンマーやシンナンマーとよばれる。しかし、父の姉妹はマーミ、母の兄弟はマーマとよばれ、さらに、母の兄弟の妻もマーミ、父の姉妹の夫もマーマとよばれる。さらにそのヴァリエーションとしてエゴの妻の両親もマーマナール（義父）・マーミヤール（義母）とよばれる。これらはマーマとマーミの尊称と言える。エゴと同じ世代は、男性は大きく二つに分かれる。兄弟と同じアンナンとタンビ、これらはイトコの一部（平行イトコ）にも適応される。しかし、それ以外のイトコ（交叉イトコ）はマッチャンとよばれる。平行イトコとはエゴの親とイトコの親が同性である場合で、母方の姉妹の子供や父方の兄弟の子供を指す（図3）。これにたいして交叉イトコは親同士が異性の場合で、母の兄弟や父方の姉妹の子供を指す。女性の場合、姉妹はアッカーとタンガチ、これは平行イトコに

図2　ドラヴィダ型親族名称体系（エゴは男性）

も当てはまる。交叉イトコはマッチという。子供の世代では、息子はマハン、娘をマハル、兄弟の子供たち（甥や姪）も同じくマハンやマハルという。これにたいして姉妹の子供たちはマルマハンとかマルマハルとよぶ。孫の世代になると、ペーレン（男の孫）とペーティ（女の孫）という二つの名称しかない。

この名称体系は、親の世代で父や母が特権視されていないということである。しかし、のちの議論で注目されることになるが、この体系は、親族すべてをある範疇に分類することが可能な、きわめて包括的なものであるということ、またそれは、性と世代に加えて平行親族（狭い意味での親族）と交叉親族（結婚を通じて関係する広い意味での姻族）のふたつに人々を分類している。妻の兄弟（義理の兄弟）もまたマッチャンであり、妻の姉妹もマッチである。そして義理の兄弟の妻は年齢によってアッカーとかタンガチとよばれ、義理の姉妹の夫はアンナンあるいはタンビとよばれる（図4）。

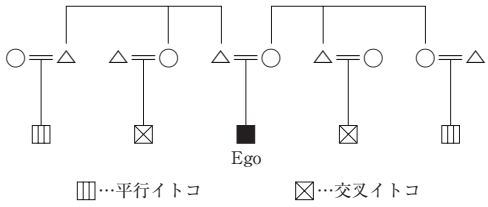

図3　平行イトコと交叉イトコ

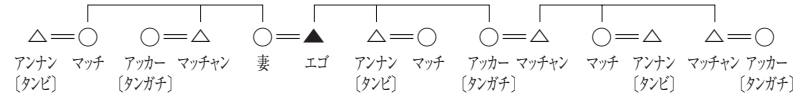

図4　姻族関係

これらはすべて、結婚は交叉イトコ同士ですべし、ということを指摘していると言える。交叉イトコと結婚することで名称は矛盾しないからだ。名称を系譜図になおすと図5のようになるが、それは各世代で姉妹交換という交叉イトコ婚（父方、母方両方の交叉イトコ婚）を繰り返すという構造が浮き上がってくる。

これはまた、AとBという二つの集団が女性を交換する関係にあるというふうにも理解できる。図5の二つの出自関係をひとつの集団とみなすことができるからだ。ある民族集団は二つの父系あるいは母系の親族集団からなり、女性を交換する。両者は、レヴィ＝ストロースの言葉を使えば、連帯（alliance）関係にある。これをAに属する個人の視点からみると、Bに属する交叉イトコの女性をめとるということになる。かれにとってBのメンバーはすべて交叉親族である。こうした関係を矛盾なく表しているのが類別的名称というわけである。

ただ、以上の説明は、名称をカテゴリーというより数世代さかのぼって系譜として理解しようとする傾向（すでに父や祖父、あるいはイトコという言葉がわれわれにとって系譜的に関連づけられた個人を意味する）や、集団というより個人間の婚姻の表れあるいは婚姻の規則として理解しがちであること、さらに名称体系（観

念）が特定の婚姻規則や集団関係（制度）を反映している、といった反映説を前提にしている、といった問題がある。つまり図2より図5が重視される傾向にあるのである。この結果、たとえば妻の兄弟がマッチャンであり、その妻が「シマイ」であり、さらに妻の姉妹（マッチ）の夫がキョウダイである、といった、名称の適用がみえにくくなる（図4）。マッチャンとは婚姻関係から見れば姻戚（義理の兄弟）といえるが、かれらの妻は姻戚ではない。この分類は先祖がどう関係しているか、といった系譜とはまったく関係のない思考によるすべての親族・姻族を分類しようとする名称（範疇）の適用だと考えるべきである。これらの問題についてはのちに改めて論じることにしたい。

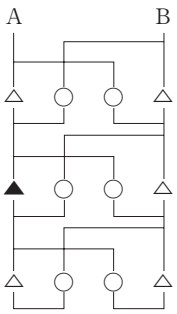

図5　双方交叉イトコ婚

モーガンは、以上のような類別的名称体系をオジブワなど北米インディアンの一部が使用していることに気づいた。さらに、伝道師へのアンケートとその回答から、南インドのタミル人も類別的名称体系を使用していることを発見し、その考察を地球規模で押し進めることの意義を確信する。一八五九年のことである。

三　『人類の血族と姻族の諸体系』の初稿

名称体系による諸民族の分布と分類は、当時の視点から進歩の尺度によって比較されることになる。地理的分布が確認されると、つぎに普遍的人類史の構築がはじまった。類別的名称体系の起源はアジアとされ、同じ類別的名称体系を持つ北米インディアンのアジア起源が強調される。さらに、類別的名称体系は未開とされ、反対に

記述的名称体系はより進んだ文明の証とされた。名称体系は、現実の人間関係、とくに婚姻関係を表しているとみなされた。そのため、実父とかれの世代に属するすべての男性をチチと呼ぶような社会は、乱婚的な社会であると推察された。名称体系が制度の表現であると考えることで、名称体系の進歩は、婚姻や相続の進歩とみなされることになった。欧米の慣習を基準とした進歩の図式が生まれることになったのである。よく知られているように、この考えをさらに発展させたのが『古代社会』という書物である。これが今日一般にわれわれの理解している記述的名称体系と類別的名称体系をめぐる関係である。

だが、以上の議論はそれほど単純に呈示されたわけではない。以下ではトラウトマンの議論[Trautmann 1987]に基づき『人類の血族と姻族の諸体系』の議論を追ってみたい。

『人類の血族と姻族の諸体系』の初稿は一八六五年に完成した。しかし、これは査読者によってそのままでは出版されることはなかった。この初稿でのモーガンの発見は、世界中の民族は親族用語体系の観点から見ると大きく二つに分かれること、そして、そのうえでアメリカ・インディアンたちが祖先を共通にし、さらにアジアにまでさかのぼるという点であった。

一八五九年一月にモーガンは世界各地に調査票Scheduleを送付する。その結果、モーガン自身の調査も含めて北米は八〇、欧米と中近東が三九、アジアとオセアニアが一八についての資料が集まった。ここからもわかるように、アフリカ、オーストラリア、中南米などが考察の対象からもれている。

地理的分布という視点から見れば不十分なものであったが、マックス・ミューラーの命名に一部したがって、モーガンはこれらの収集資料を大きく三つに分類する。まず、アーリアン（Aryan）、つぎにテュラニアン（Turanian）、そしてガノワニアン（Ganowanian）である。アーリアンの語源は（当時）アル（AR）、すなわち「耕す」という動詞に由来し、テュラニアンはテュラ（Tura）に由来するが、これは騎士の素早さを意味する。最後に

ガノワニアンはモーガンの用語で、弓と矢を意味する。これはイロコイ同盟を形成していた民族集団のひとつセネカの言葉であった。モーガンはこれらの言葉を使うことで、狩猟（・採集）民から遊牧民、そして農耕民へという、生業の進化観念をそこにこめようとしていた[Trautmann 1987 : 126]。この三つに、セム、ウラル、マレイの三つが加わる。だが、これら六集合は文献学的な見地からの最上位における分類であり、親族用語に注目するモーガンの視点からは大きく二つに分かれるだけである。すなわち、アーリアン、セム、ウラルが記述的、テュラニアン、マレイ、ガノワニアンは類別的に分かれる。

実はモーガンは初稿で、記述的名称体系を「自然的」、類別的名称体系を「人為的」と形容していた。自然というのはこの場合、「自然からの暗示」を意味し、それはほんの少しの知識あるいは省察によって到達できることがらを意味していた。そしてそれはほぼ普遍的に人類に到達可能なものである。これにたいし、人為的な親族名称体系は、どのような条件においても「自然に」理解できるものではない。そうモーガンは判断した。そしてそれは歴史のある時点に人間によって発明されたのだ。それゆえかれは人為的と名づけたのである。ここには大いなる矛盾がある。文明に到達していない側の人々がきわめて複雑かつ体系的な親族用語の世界を発明した、というわけである。とすれば、両者の間にはまったく時系列の関係はない、ということになろう。事実、モーガンの『人類の血族と姻族の諸体系』初稿は、われわれが想定していたのに反して、進化論というより分類の書物であった。人類の起源をひとつとみなすモーガンにとって、この結論は従来の文献学の分類よりさらに進んだものといえた。なぜなら、文献学では、どう頭をひねっても地球上に認められる数ある言語をひとつにまとめることはできず、せいぜい複数の語族の存在を示唆できるだけであった。つまり、言語の、したがって人類の、統一的起源を示唆するにはほど遠かったからだ。それにたいし、親族名称は人類を大きく二つにまとめた。しかし、さらに一歩進んで人類の統一を主張するには、まだ両者の関係を明らかにする必要があったのである。

四　進化主義の導入

親族名称に注目することで人類を大きく分かつ二組の集合が発見された。だが、両者の関係についての説明はそこにはなかった。これが改訂版において、親族・婚姻・家族制度の「進化」あるいは「憶測の歴史 conjectural history」を反映したものとして統一的に理解されることになった。それは査読者の一人マッキルヴェインの示唆によるものであった。当時のスミソニアン研究所所長はジョセフ・ヘンリーで、モーガンの書物の出版を左右する力を持っていた。モーガンはヘンリーにあてた手紙でつぎのように述べている。日付は一九六七年七月二五日のことである。

〔本書の〕最後の章で、私は類別的名称体系の起源について憶説の解決法を加えた。それは以下のような一連の慣習や制度が未開時代に存在したという仮説に基づいている。それは乱婚から始まり、兄弟姉妹の性交あるいは同棲、共同家族、部族組織へと続く段階である。これらが一緒になって解決となる。その後、時代が進み、人類の経験が増すにつれて、単一の対の結婚が現われる、それから一夫多妻を通じて父権家族が生まれる。そして最後に私有財産の確立と単線的な土地相続によって真の家族が現われた。〔……〕マッキルヴェイン博士がこの章を読み終えた後、先行する章で記述されていることだが、一夫多妻と一妻多夫が結合していることがはっきりしている形態であるハワイ型の慣習をもとにこの議論を取りあげた。そして、この慣習をもとに体系の起源についての解決法をわたしに送りつけた。こうした慣習だけでは解決に達するには

> 不十分であったが、残りの原因を見いだすことを可能にした。それらは、もし想定されるなら、出自の性格から名称体系の起源について完璧な解決を与え、名称関係が実際に存在したものであることを示すであろう。〔……〕マッキルヴェイン博士の示唆は大変価値のあるものであった。それは現在のところこの研究が到達したものの中で一番重要なものである。[Trautmann 1987 : 167－168]

ただ、マッキルヴェインの示唆は、あくまで名称と婚姻との対応にとどまっていた。これを進化の図式に適用したのはモーガン自身であった。

類別的親族用語体系は当時の「家族」の様態から「自然に」説明できることになった。記述的体系も類別的体系も自然なものとなったのである。以下、われわれの眼に触れる『人類の血族と姻族の諸体系』について検討していくことにしよう(3)。

まずモーガンは二つの親族名称がきわめて対照的であることを指摘する。そしてこれらの比較は、人類の進歩を示すと宣言している。

> これらの体系の比較と、それが歩んできたほんの少しではあるが明白な変化を注意深く研究すると、人間が野蛮な時代からの進歩を特徴づける慣習や制度の大いなる連続あるいは連鎖の、すくなくとも推察可能な復活へと行き着く。これはもっとも期待しなかったことであった。そしてこれらの制度によって、人間は乱交の状態から最終的な文明へと登りつめたのである。実際、人類の進歩は文明の時代よりも野蛮な時代においてその程度と範囲において大きいといえる。[Morgan 1871 : vi－vii]

そして、類別的名称体系が記述的名称体系に変化した理由を国家など親族以外の制度の発達によると考えてい

る。再び引用しよう。

> 法律の保護すなわち国家の保護が親族の保護に取って代わった。タミル社会では、兄弟の息子と私の従兄弟の息子は私の息子である。有益な目的が、こういうふうにして親戚の紐帯を強めることで実現したかもしれない。しかし、文明の視点では、相続にあたってこれらの傍系の息子たちを自分自身の息子と同じ立場におくのは、明らかに不正であろう。ここから財産の増加とその分配の決定によって、たとえ以前の体系によって制限されていようとも、血族をいくつかの親等により正確に分けるということが生じよう。[Morgan 1871: 14]

ここでモーガンは物質的な繁栄と親族組織の変化、親族集団の意義の減少、そして名称の変化が密接に関係したものとして理解していることがわかる。モーガンが進歩の基準としてとくに注目したのは婚姻形態であった。それは、乱交（promiscuous intercourse）から一夫一妻制へ、またそれと並行して親族から家族へという変化した。類別的名称にはマレイ型親族名称とテュラニアン・ガノワニアン型親族名称の二つに大きく分かれる。乱交から異なる世代間での結婚が禁止され、兄弟姉妹同世代婚のみが可能となったのがマレイ型名称を持つ社会である。そこでは男は一夫多妻、女は一妻多夫でハワイ型と呼ばれる結婚が認められる。その家族は共同家族（The Communal Family）という。さらに外婚制度が導入され兄弟姉妹間の結婚が禁止される。テュラニアン・ガノワニアンは二組の兄弟姉妹間の結婚を示唆し、家族は野蛮家族（The Barbarian Family）と名づけられた。最後は一夫多妻婚（Polygamy）から父権的家族（The Patriarchal Family）が生まれ、他方で一夫多妻（Polyandria）が生じ、そして財産の出現と一系的土地相続の決定によって単婚にいたると名称体系もウラル、そしてアーリアン、セム型になるという。ここで家族は文明家族（The Civilized Family）となる[Morgan 1871: 487–494]。

こうして、初稿において説明できなかったふたつの親族用語の体系が時系列に並べられ、家族の段階的な進化によって説明されることになる。それらは人類史という大きな統一的物語に組み込まれることになるのである。自然的と人為的という言葉が削除され、それらに代わって、記述的と類別的が採用される。初稿ではより普遍的であった記述的体系が、進化の後期の段階に属するものとして理解されることになったのである。そして、発明の産物とされた類別的体系が、すべての人類が過去に体験した家族制度を示唆している残存物ということになった[4]。

ただ、モーガンは類別的名称体系が示唆する交叉イトコ婚を人類史のある段階に位置づけることはしなかった。そのような指摘は査読の段階でなされていたにもかかわらず、である。これについてトラウトマンは、モーガンが交叉イトコ婚を採用しなかった理由は、彼自身が母方の交叉イトコ婚を実践していたからだ、とする[Trautmann 1987: 243–244]。たしかに、交叉イトコ婚を人類史のある段階に位置づければ、かれの婚姻は古代の残存物となってしまう。かれにとって、そのような自己像は耐えられなかったにちがいない。

五　『古代社会』における家族と親族

一八七七年に公刊された『古代社会』はすでになくなったマッキルヴェインに捧げられている。かれが『血族と姻族』に与えた影響を考えれば当然のことであろう。本書では人類の進化が発見と発明、統治・政治形態、家族、財産の四つの領域において論じられている。本書は全体で二六章からなるが、第一部が発明と発見（三章）、第二部が統治・政治形態（一五章）、第三部が家族（六章）、第四部が財産（二章）となっている。章の数からも

明らかなように、本書の中心課題は統治・政治形態である。その骨格はすでに『血族と姻族』に認められた図式と大差ないが、後者が名称体系と家族あるいは婚姻制度の進化に限定されていたことを考えると、その議論はより包括的なものとなった、と言えよう[5]。ただし、本書の大半を占める政治の領域においても親族や家族が彼の議論で中心的役割を果たしている。

かれは地質学的時間が聖書の時間を完全に凌駕したこと、それによってはじめて進化の図式が妥当な形で考察可能となったことを指摘する。さらにかれは、人類は単一起源をもって進化していくのであり、複数起源や退化論を退ける。「人類種族の歴史は、根源において一であり、経験において一であり、進歩において一である」[モルガン 一九五八、二〇頁][6]と。かれは、本書のさまざまなところで繰り返しこの主張をしているが、序論の最後の文章をここで引用しておこう。

> 最後に人類の経験はほぼ斉一の経験を通過したこと、すなわち類似の状態において人類の必要としたものは本質的に同一であったこと、そしてまた人類の精神的要素の作用は、あらゆる人種の頭脳の特殊な同一性によって斉一であったことが注意さるべきであろう。[モルガン 一九五八、二八頁]

モーガンはここで、野蛮から未開、そして文明へという進化図式を呈示する。前者二つはさらにおのおの三段階（下層、中層、上層）に分かれる。たとえば西欧人との接触以前のポリネシア人やオーストラリア人（アボリジナル）は野蛮の中層状態にあった。アメリカ・インディアンの場合、野蛮の上層より下に位置する人たちはいない。かれによると、野蛮と未開を分けるのは、製陶技術であり、未開と文明を分けるのは文字の使用であった。そして文明は古代と近代の二つに分かれる。現存する社会の多様性は、人類進化の各段階を示しているのである。この発展には生活技術による資源の管理が重要な役割を果たしていたと指摘する。

すでに示唆したように、本論と直接関係する家族については五つの形態を指摘している。それは、血縁（Consaguine）家族、プナルア（Punaluan）家族、対偶婚（Syndyasmian or Pairing）家族、父権的（Patriarchal）家族、一夫一妻（Monogamous）家族である。血縁家族は一集団内における直系および傍系の兄弟姉妹の通婚を基礎としていた。プナルア家族は、数名の姉妹たちとその夫たち（かならずしも血縁関係はない）との通婚を基礎としていた。あるいは反対に数名の兄弟たちとその妻たち（かならずしも血縁関係はない）との通婚を基礎としていた。いずれの場合も、男性の集団が結合して女性の集団と結婚して生まれる家族である。対偶婚家族は、一対の男女の結婚に基礎をおくが、その関係は一時的なものであった。父権的家族はいわゆる一夫多妻婚に基礎をおいていた。この図式では一妻多夫婚が無視されている。そしてモーガンは血縁、プナルア、一夫一妻家族を基本的なものとしている。

モーガンはこれらの家族形態を、婚姻や親族名称との関係で詳述し、最後にその発展の道筋をたどっている。そこでの進化の図式は以下の通りである。

1乱婚関係、2一集団内における直系および傍系の兄弟姉妹の通婚、3血縁家族の誕生、4血族および姻族のマレイ型親族名称、以上が第一段階である。5性を基礎とする組織および兄弟姉妹間の通婚を阻止するに寄与したプナルア慣習、6プナルア家族の誕生、7兄弟姉妹を結婚関係から排除した氏族組織、8テュラニアン型およびガノワニアン型名称。これが第二段階。9氏族組織の影響の増大および生活技術の改善、10排他的同棲を伴わない一対の男女観の結婚、11対偶婚家族の誕生、これが第三段階。そして、12遊牧生活、13父権的家族、の第四段階を経て、14財産の発生および不動産直系相続の設定、15一夫一妻制家族、16アーリアン、セム、ウラル型名称体系の第五段階に至る［モーガン　一九五六、三一九―三二〇頁］。

先の図式と比較すれば、血縁家族は共同家族、野蛮家族がプナルア家族に相当する。前回の図式では認められ

ていなかった対偶婚家族を経て、父権的そして一夫一妻家族へと発展していく。後者は以前文明家族と呼ばれていた。だが、原則として婚姻と、家族形態と親族名称体系との関係に大きな変化はないと言えよう。

六　モーガン以後の親族研究――レヴィ＝ストロースとニーダム

フランスの人類学者クロード・レヴィ＝ストロースはその大著『親族の基本構造』をモーガンに捧げているが、その理由をつぎのように語っている。

本研究をルイス・ヘンリー・モーガンの追憶に捧げるにあたっては、三つの心づもりも働いた。我々が非力ながらも後塵を拝して入り込んだ研究領域、まずはその偉大な開拓者を称えておきたかった。次に賛辞をとおして、彼を開祖とするアメリカのあの人類学に対しても敬意を表しておきたかった。〔……〕さらにまた次の点を改めて学派の人々に想起してもらうことによって、できるなら学派に負う我々の学恩をわずかなりとも返しておきたいと考えた。科学的綿密さと観察の正確さが、理論的であることをはばからず自任する思考や大胆な哲学的センスと相容れないわけではないと見ていた時期、モーガン学派はことのほか偉大であった、と。〔レヴィ＝ストロース 二〇〇〇、二三頁〕

レヴィ＝ストロースの議論は多岐にわたるが、その中心となるのは親族の基本構造と複合構造を区別したうえで、基本構造とされる社会について婚姻の類型化を試みるところにあった。基本構造とは、結婚相手（のカテゴリー）を禁止するだけでなく指定しているような社会を指す。複合構造に分類される日本社会なら結婚範囲は近

親婚の禁止によって定められている。それ以外の人間とは誰と結婚してもいい。これにたいし、基本構造においては結婚を誰としてはいけないかというだけでなく誰とすべきかということも決められている。それはあくまでカテゴリーであって、わたしたちは○○の集団と結婚する（しなければならない）、という形を取る。それは二つの場合が考えられる。男性を中心に考えると、二つの集団が女性を相互に交換する場合と、三つ以上の集団が、特定の集団から女性をもらうだけでわたさない、という場合である。前者は女性の流れが双方向的であるのにたいし、後者は一方向的である。レヴィ＝ストロースは前者を限定交換、後者を一般（全面）交換と呼んだ。

こうした結婚のあり方は、個人の視点から見ると、すでに指摘したように、交叉イトコと結婚すべしという形を取る。交叉イトコとは、親の性が異なる子供たちを指す。つまり兄弟姉妹の子供は相互に交叉イトコであるが、兄弟の子供や姉妹の子供は平行イトコと呼ばれる。限定交換は二組の兄弟姉妹が姉妹を交換し、さらにそこでできた子供（兄弟姉妹）の姉妹を交換していく、という形になる。これを双方交叉イトコ婚という（図5）。これにたいし、一般交換の場合、女性が一方向に流れるのは、母方あるいは父方の交叉イトコとのみ結婚する場合である。母方交叉イトコ婚では、女性はどの世代でも同じ方向に流れるが、父方交叉イトコ婚の場合、世代ごとに女性の動く方向が変わる（図6、図7）。この場合、出自集団が三本必要であることからわかるように、最低三集団が女性をやりとりすることになる。そして、こうしたイトコ婚のあり方は親族名称にも認められる。たとえば、双方的イトコ婚の社会では父の姉妹は妻の母でもある。母の兄弟は妻の父でもある。そして、母の兄弟の妻は父の姉妹である。だが、母方交叉イトコ婚を規定する社会ではかならずしも同一ではないかもしれない[7]。モーガンが類別的親族名称と呼んだものの一部は、レヴィ＝ストロースの視点からは基本構造・交叉イトコ婚を示す体系となる。

レヴィ＝ストロースは、以上の結婚の分類を進化に結びつけて論じているわけではない。

ゆえに我々としては、任意の個別文化が、あるいは人類の任意の発展段階が限定交換か全面［一般］交換のどちらかを発見すると考える、いかなる歴史的・地理的解釈をも断固受け入れないでいなくてならない。［……］交換の三つの基本構造――双方交換、母方交換、父方交換――は、少なくとも無意識的な形でならつねに人間の頭のなかにあって、人間精神はその一つをほかの二つと対立させて――さらに関連づけて――考えないでは想起できない、と。［レヴィ＝ストロース 二〇〇〇、七四九頁］

しかし、以下の文章が示すように、基本構造から複合構造への変化についてはあきらかに進化ということばで理解していた。

複数の局所的限定交換体系が一つの包括的全面交換体系の内部で働きはじめ、次第にそれに取って代わっていく。集団は全面交換の単純な形式を放棄し、代わりに限定交換の同じく単純な形式を採用する。だがまた集団は全面交換原理を守りとおすこともできる。全面交換の単純な形式を放棄して、複雑な形式を援用すればいい。これがヨーロッパのたどった進化である。［レヴィ＝ストロース 二〇〇〇、七六三頁］

オックスフォードを拠点に刺激的な研究成果を発表してきたロドニー・ニーダムは、エドマンド・リーチやルイ・デュモンとならんで、レヴィ＝ストロースの親族論・婚姻論に深い影響を受け、英米圏の人類学会での普及に大きく貢献した。親族研究におけるニーダムの貢献は多岐にわたるが、ここではかれの進化主義的な議論にしぼって話を進めることにしよう。かれは親族名称の研究[1966, 1967]からそこになんらかの進化の道筋を明らかにしようと試みている。レヴィ＝ストロースの場合とすこし用語が代わっているが簡単に述べるとつぎのようになる。

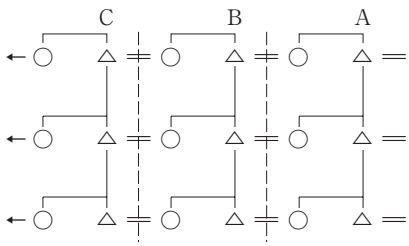

図6　母方交叉イトコ婚

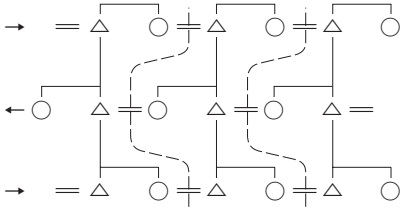

図7　父方交叉イトコ婚

すなわち、まず二つの外婚集団（半族 moiety）が相互に女性を交換する対称的連帯（exogamous moieties plus symmetric alliance）から外婚集団のない二つのセクション（地域集団）へ、つぎに名称は（双方的イトコ婚を示す）対称的だが、結婚は（母方あるいは父方交叉イトコ婚を意味する）非対称的連帯、さらに名称も結婚も非対称的となり、最後は二重出自や出自原理のない共系といったさまざまな可能性にむかう。こうして基本構造を保持していた簡潔な原理は最終的に崩壊すると論じている[Needham 1967 : 45–46, cf. Needham 1974 : 40][8]。

ニーダムにとってこうした変化は不可逆的な進化の過程である。そこにあるのは「自由の幅 latitude」が大きくなるという原則だけである。

> 進化論的な説明がここでは妥当しよう。というのも名称と連帯〔結婚〕との対比は構造的な変化を示しているからだ。二つとも、対称から非対称へと、同じ方向に向かって変化していることが直ぐに推察できる。自明の傾向は基本から複雑へ、体系から調整へ、〔名称については結婚相手を決める〕規定から非規定へ、そして〔相手は〕範疇から選好へというものである。こうして、社会的エントロピーというたとえで考えられるかもしれない自由と個人化の増大という漸次的な進歩が生じるのである。[Needham 1967 : 46]

ニーダムが一九六六年と一九六七年の論文で取りあげているのは、北東インドのガロ、東インドネシアのフローレス諸島に住むマンガライ、チリのマプーチェである。最初の二つは親族名称体系（関係名称）が対称的規定婚を表すが、実際の婚姻規則は非対称的である。つまり、親族用語はあたかも交叉イトコとの結婚を表し、またそれによってのみ矛盾がないかのような体系となっているわけである。しかし、実際の制度は交叉イトコとなら母方でも父方でもいいのではなく、母方の交叉イトコ、すなわち母の兄弟の娘を典型とするイトコとの結婚のみが許されているのである。最後の事例はやはり婚姻規則は非対称だが、親族名称体系は規定的でない場合である。ニーダムの主張は名称（範疇）の次元と行為・規則の次元には論理的な連関というものはない、ということを明らかにすることであるが、たとえばなぜ非対称的親族名称体系と対称的婚姻との組み合わせが存在しないのか、という問いにたいする答えが、さきの進化主義的な図式ということになる。人間関係を表す用語（親族名称）に変化がないまま、婚姻規則が変わる、というわけである。

七　進化を決定する要因――スリランカの漁村から

以上モーガンからレヴィ＝ストロース、そしてニーダムについてその親族論における進化の視点をたどってきた。かれらは言葉こそ違え、基本的には類別から記述へ、基本から複合へ、規定から非規定へという変化を不可逆的な進化としてとらえている。しかし、変化はいかにして起こるのか。ニーダムが呈示した進化の一線的流れを決定づけるものはなにか。ニーダムはいくつかの事例を検討して、人口減、外婚集団の崩壊（内婚化）、地域内婚姻の増加など「たくさんの本当に多様な要因」[Needham 1974 : 39]を挙げているが、それらが決定的とは考

えていない。かれはそれをもっと一般的な可能性と拘束力で、形式的な性格をもつと考えている。だが、「自由度」以外に具体的になにかについては触れていない。つぎに、この問題を扱ったサセックス大学のスティラットの論文をとりあげたい。

スティラットの調査地はスリランカのシンハラ人漁村であった。シンハラ人は南インドのタミル人と同じく、双方交叉イトコ婚を示唆する類別的名称（ドラヴィダ型名称体系）が使用されている。しかし、他のシンハラ人と異なり、漁民たちの使う名称は厳密には双方交叉イトコを示唆する類別的名称とは言えない。変異をいくつかあげてみよう。まず義父と叔父とはまったく別の用語で示される。さらに、一般には、姻族を示唆する用語が使われないで、代わりに血族用語が使われる。また結婚相手として区別されなければならない交叉イトコの代わりに、平行イトコと同じように兄弟・姉妹などの用語が使われる。さらに、「わたし」の妻の姉妹の夫のような姻族の姻族は、ドラヴィダ型名称体系では同じ集団と結婚するのだから「わたし」の血族に分類されるが、この漁民たちはやはり姻族とみなしている。

なぜ類別的親族名称が変化したのか。名称は婚姻のあり方を反映しているという立場に立てば、変化が意味しているのは、この漁民たちの間には最初から結婚相手が決まっていない、規定的でないということである。スティラットによると、親族用語は社会の価値を示すイデオロギーでもある。その視点から考えると、類別的親族名称が想定しているのは先験的な婚姻の取り決め、つまりイトコを理想とする近親婚の薦めである。スリランカのように、境界のはっきりした出自集団がない社会では、交叉イトコ婚の規定は二つの集団間の連帯を意味しない。そもそもそのような集団が存在しないからだ。交叉イトコ婚の規定はたんに、いままで婚姻関係のあった人たちと結婚すべし、ということを意味する。近親集団の内部で結婚をすることでその集団の存続を図るということを意味する。したがって、ここでは結婚は親族（内婚集団）に付随する制度であることを意味している。言い換え

れば、シンハラ社会において類別的名称は結婚そのものの意義を皮肉にも否定していると解釈できる。とすれば、そのような類別名称が変化したという事実は、調査漁村では反対に結婚の価値が高くなっていることを意味しないか。つまり、親族集団ではなく、結婚を基礎とする家族――核家族――の重要性が増したのである。

スティラットによればこの漁村の主要な生産手段である筏漁が夫婦を単位とする漁法で、世帯も夫婦を中心とする核家族を理想とする。そして世帯は相互に競合的な関係にある。

〔名称と婚姻規則〕は近親との結婚や〔姻族間で〕結婚の繰り返しを排除しようという道義性（morality）を表している。それらは紐帯を拡大し基本家族と世帯の個人化を強調する道義性である。そこで個々の基本家族はよりひろい親族に包み込まれてはいけないのである。(9) [Stirrat 1977 : 287]

つまり、親族名称体系は特定の道義性を表しており、その変化は道義性の変化を意味する。道義性は、人間関係の理念を意味し、それはさらに特定の財産の所有形態や生産関係と関連している。したがって、スリランカの漁村で生じた、親族名称体系の変化はつまるところ、本来のドラヴィダ型親族名称が前提としていた財産の共有の個人主義化や集合的生産活動から個人中心の生産活動への変化を意味する。

スティラットは進化や進歩という代わりに変容（transformation）という言葉を使っている。しかし、かれの主張は結局のところ、経済活動での「進化」（市場化、資本主義化）が親族集団を崩壊させ、結婚のあり方とイデオロギーとしての親族名称体系を変化させたということである。一九世紀の進化論者たちが身分から契約へ、集団から個人へといった言葉で漠然と表現していた「進化」の方向をより実証的に明らかにした、ということになろう。

以上、モーガンの親族名称をめぐる進化論的思考から、その後の人類学における主要な親族名称の研究をとりあげた。驚くべきことに、進化論的パラダイムの衰退にもかかわらず、一九七〇年代まで親族研究においては進化という概念でしばしば変化が論じられていたということである。そしてその議論は、より緻密になっていると言える。しかし、すでに指摘したように、スティラットもその後の親族研究者も進化よりも変容という概念を使用する傾向にある。たとえば、一九九三年に出版された基本構造をめぐる書物は『親族の変容』[Godelier et al 1993]というタイトルである。ここにおいて進化という概念は親族研究から払拭されたのだろうか。一見そのように見える。しかし、編集者の一人で最年長のゴドリエによる長文の「あとがき、複数の変容と複数の進化の筋道」という最終章で、かれはつぎのように自問している。「親族用語と体系は進化したのか?」と。ここでゴドリエが親族用語の「進化」ということばで意味しているのは、変化の方向がはっきり一方的であるということ、ある体系が別の体系へと変化することはあっても、なんでもいいわけではないこと、また変化の方向は可逆的ではないこと、こうしたことを含めて進化ととらえている。それはいくつかの変容の末に後戻りのきかないところへと移行するのである。[10] 重要なことは、モーガンの発見後一五〇年近く経った現在においても類別的親族名称とその後発見されたさまざまな変異体は、人類学者にたんなる比較や分類以上の想像力を喚起させたということである。それは人類社会の進化の道筋をたどるという、とてつもなくおおきな物語に参加することを意味していたのである。

注

（1）進化についての最近の議論についてはほかにアール[Earle 1994]が詳しい。

（2）モーガンについて、詳しくはクーパーとトラウトマンの著作[Kuper 1988：42－75；Trautmann 1987]を参照。またその思想的な背景については Swetlitz[1989]をも参照。

（3）本章ではモーガンによる類別的名称内の分類の妥当性や、「進化」の段階的発展の妥当性には触れないでおく。実際、モーガンが同一視したタミルとイロコイの親族名称がまったく異なると判明したのは一九六〇年代に入ってからだし、タミル（南インド、ドラヴィダ型親族名称）とオーストラリア（カリエラ）や南アメリカの先住民たちの親族名称を分けるべきであるという提案はつい最近のものである[Godelier 1993]。

（4）とはいえ、改訂版から初稿の議論がまったく払拭されたわけではなく、それが矛盾として批判されている[Trautmann 1987：256]。

（5）宗教などが本書の考察外にあることをモーガンは認めている［一九五八、二六頁］

（6）本論では用語の一部を訳書と変更していることをことわっておく。

（7）ここでは詳しく議論できないが、親族名称が示す婚姻規則と実際の規則とはかならずしも対応しているわけではない。この点については、後のニーダムの議論からも明らかである。

（8）ほかにフォースがインドネシアの東スンバ島を対象に、ニーダムの進化論的図式を肯定的に検証している[Forth 1990]。

（9）生産手段やイデオロギーなどの用語から、一九七〇年代に支配的になったマルクス主義の考え方が、とくにモーリス・ブロックの仕事[Bloch 1971, 1973]を通じてスティラットの研究に影響を与えているのは明らかであろう。

（10）奇妙なことにゴドリエは親族名称をめぐるニーダムの議論をまったく無視している。またニーダムと同じく、具体的な変容要因について言及していないという点で、スティラットの分析の意義はなお大きいと評価したい。

参照文献

Asad, Talal 1974. *Anthropology and the Colonial Encounter*. London : Ithaca Press.

Bloch, Maurice 1971. The Moral and Tactical Meanings of Kinship Terms. *Man*（*N.S.*）6 : 79－87.

——1973. The Long and the Short Term : The Economic and Political Significance of Kinship. In J. Goody（ed.）, *The Character of Kinship*. London : Cambridge University Press.

Dunbar, Robin, Chris Knight and Camilla Power（eds.）1999. *The Evolution of Culture : An Interdisciplinary View.* Edinburgh : Edinburgh University Press.

Earle, Timothy 1994. Political Domination and Social Evolution. In Tim Ingold（ed.）, *Companion Encyclopeadia of Anthropology : Humanity, Culture and Social Life.* London : Routledge.

Forth, Gregory 1990. From Symmetry to Asymmetry : An Evolutionary Interpretation of Eastern Sumbanese Relationship Terminology. *Anthropos* 85 : 373－392.

Godelier, Maurice 1993. Afterword : Transformations and Lines of Evolution. In Godelier, Maurice, Thomas T. Trautmann, Franklin E. Tjon Sie Fat（eds.）, *Transformation of Kinship.* Washington : Smithsonian Institute Press.

Godelier, Maurice, Thomas T. Trautmann, Franklin E. Tjon Sie Fat（eds.）1993. *Transformation of Kinship.* Washington : Smithsonian Institute Press.

Hallpike, C.R. 1988. The *Principles of Social Evolution.* Oxford : Clarendon Press.

Kuper, Adam 1988. The *Invention of Primitive Society : Transformation of an Illusion*. London : Routledge.

レヴィ＝ストロース，クロード 二〇〇〇（一九四九）『親族の基本構造』（福井和美訳）青弓社。

Morgan, Lewis Henry 1871. *Systems of Consanguinity and Affinity of the Human Family.* Washington : Smithsonian.

モルガン，ルイス・ヘンリー 一九五八（一八七七）『古代社会』（青山道夫訳）岩波書店。

Needham, Rodney 1966. Terminology and Alliance 1 : Garo, Manggarai. *Sociologus* 16 : 141－157.

――1967. Terminology and Alliance 2 : Mapuche, Conclusions. *Sociologus* 18 : 39－53.

――1974. The Evolution of Social Classification : A Commentary on the Warao Case. *Bijdragen tot de Taal-, Land-, en Volkenkunde.* 130 : 16－43.

ラドクリフ＝ブラウン，A・R 一九七五（一九五一）『未開社会における構造と機能』（青柳まちこ訳）新泉社。

Stirrat, R.L. 1977. Dravidian and non-Dravidian Kinship Terminologies in Sri Lanka. *Contributions to Indian Sociology*（*N.S.*）11(2) : 271－293.

Swetlitz, Marc 1989. The Minds of Beavers and The Minds of Humans : Natural Suggestion, Natual Selection, and Experiment in

the Work of Lewis Henry Morgan. *History of Anthropology*（*Bones, Bodies, Behavior : Essays on Biological Anthropology*）3 : 56–83.

田中雅一 二〇〇一 「英国における実用人類学の系譜――ローズ・リヴィングストン研究所をめぐって」『人文学報』八四号、八三―一〇九頁。

Trautmann, Thomas R. 1987. *Lewis Henry Morgan and the Invention of Kinship*. Berkeley : University of California Press.